

第6章

事業の成果

- 団長報告
- 事業アンケート



2025年度日本青年韓国派遣団活動報告—60年の絆 영원히!— 勝間田 真由子

●はじめに

2025年は日韓外交正常化60周年の節目に当たり、本事業ではソウルと東京の双方で記念式典が開催された。両国が青年交流を重視する姿勢を改めて示す中、この年に事業が実施された意義は大きい。

今年度は、従来は韓国と日本で別々に行っていたディスカッションプログラムを「ソウルで開始し、帰国後の実践を経て東京で総まとめを行う」一体型へと刷新し、日本青年は正式に東京開催の「日韓青年交流のつどい」ⁱに参加することとなった。約一か月にわたり思考と行動を往還させた議論は、「日韓青年AGENDA25」という成果として結実した。これは両国青年が未来に向け共有すべき課題を体系化したものであり、その形成過程にこそ本事業の価値があった。

私たち派遣団は、事前研修、10日間の韓国派遣、東京でのつどいまでの全行程を通じて、「60年の絆を未来へつなぐ」という思いを共有した。本レポートでは、団長・事業担当者としての気づきとともに、派遣団の歩みを記録する。

● 日本青年韓国派遣団の結成と事前研修から出発まで

盛夏の7月10日、日本青年20名と団長・副団長・渉外を含む計25名が国立オリンピック記念青少年総合センターに集い、2025年度日本青年韓国派遣団（以下、派遣団）が結成された。日本青年は、書類選考、ウェブテスト、オンライン面接を経て選抜された精鋭であり、副団長のふたりは国際交流・青少年育成に豊富な知見を持ち、渉外のふたりは両国語の卓越した運用能力を備える。団長を拝命した私は、韓国に特段の専門性はないが、派遣団を代表して公式の場に臨むこと、事業担当者として今後の事業の発展を見据えてプログラムを体験すること、韓国側との協働関係を深めることが期待されていたと受け止めている。

事前研修では、副団長が進行するアイスブレイクを

皮切りに、有識者講師による韓国の社会事情に関する講義、外務省の現役外交官による韓国情勢と日韓関係に関する講義、韓国人留学生とのディスカッション体験講座などを次々に受講した。また、日本代表としての心構えを養うため、駐日韓国大使館韓国文化院を訪問し、パク・ヨンヘ院長から歓迎の言葉をいただくとともに、同院職員から韓国文化についての講義を受けた。さらに当日は、パク院長の御厚意により「民藝運動」で両国を繋いだ日本の思想家・柳宗悦の特別展ⁱⁱを職員の案内のもと見学し、韓国文化への理解と、両国の文化的な連続性への認識を深める貴重な機会となった。

また本年度は「国際社会青年育成事業」「日本・中国青年親善交流事業」と合同で研修を実施したため、三事業合同での懇親会も開催され、他団の特色に触れつつ、韓国団としても団目標の紹介やK-POPダンスを披露し、団としての一体感が芽生えた最初の瞬間となった。

多彩なプログラムを三日間で駆け抜けた研修であったが、副団長と渉外の支えもあり、全員が気力と節度を保ちつつ臨み抜いた。日本代表青年団としての自覚と、派遣までに準備すべき課題の整理が一定程度進んだ結果となった。

事前研修後から10月の出発前研修までの約3か月間、青年たちは両国の社会事情や韓国語に関する自主学習を進めるとともに、オンラインミーティングを通じて派遣に向けた準備を進めた。学業や仕事との両立で参加に限られる日もあったが、司会進行役の青年たちは、毎回明るく場を支えて全体の士気を保ち、有志による発表、近況報告、日本文化紹介の練習など内容も工夫して密度の高い学びあいの場へと仕立てていた。

並行して、名刺や団幕など交流で使用するグッズの作成、SNSアカウントの立ち上げ、ディスカッションの検討、記録体制の整備など、担当係ごとに主体的に準備を進めた。振り返れば、この3か月の自主研修をいかに充実させるかが、現地で得られる経験の深みを大きく左右するものであった。

● 韓国派遣（10月20日～10月29日）

10月20日、ソウルに到着した派遣団は、韓国青少年活動振興院（KYWA）ⁱⁱⁱ を訪問し、韓国での活動日程のオリエンテーションを受けた。この日は、ソン・ヨンギ理事長及び昨年度の韓国青年団団長を務めたキム・ギョンファン理事、コン・ヒョクド青少年活動振興部本部長、本年度団長のキム・ジンゴル同部部長、昨年度から引き続き副団長を務めたキム・ボリムマネージャーをはじめKYWAの皆さんの歓迎を受け、翌日からの活動に対する期待と興奮が高まっていった。

（性平等家族部への表敬訪問）

10月21日は韓国性平等家族部を表敬訪問した。チェ・ウンジュ青少年政策官をはじめ性平等家族部の皆さんが温かく迎えてくださり、和やかな雰囲気の中で面談が始まった。チェ政策官からは、1987年から続く本事業の歴史とその意義に触れつつ、国交正常化60周年を迎える今年は、単なる交流を超えて、次世代を担う両国青年が一層相互理解を深め、未来志向の関係を築くことが何より重要であるとの期待が述べられた。

日本側からは、訪問受入への御礼を申し上げるとともに、この節目に青年交流が行われる意義や、過去の参加青年が築いてきたネットワークの価値を共有した。また、本年度スローガン「60年の絆 영원히！」を紹介し、対話と理解を通じて青年同士の絆を未来へ継承したいという日本青年の思いを伝えた。拙いながらも韓国語を交えて述べた際、チェ政策官はじめ性平等家族部の皆様が終始温かな表情で傾きながら耳を傾けてくださったことが心に残っている。続いて、性平等家族部より組織概要と青少年政策に関する講義が行われた。なかでも、政策の当事者である青少年が政策形成に参画する韓国の「青年政策調整委員会」についての説明は示唆に富むものであった。

その後、青少年活動振興課主催の午餐会が開かれ、韓国の伝統料理を囲みながらヤン・チョルス青少年活動振興課課長と懇談した。日本青年からの活発な質問に対してヤン・チョルス課長が一つ一つ丁寧に答えてくださった。会場は閣僚級の来賓をもてなすこともある格式ある場所とのことで、心を尽くして迎えてくださった御厚意に、深い敬意と感謝の念を抱いた。

外国の政府機関で幹部と直接対話することは、多くの日本青年にとって初めての経験であったが、皆、礼節を保ちながら落ち着いて臨み、時には韓国語さえ交えながら、自らの考えを堂々と述べていた。

（施設訪問等10月21日～24日）

韓国では、ソウルのほか、スウォン、チョナン、ヨンチョン、パジュを訪れ、さまざまな機関や施設を訪問した。

ソウルでは、在大韓民国日本国大使館公報文化院を表敬訪問し、川瀬和広院長より、大使館の役割や日韓関係の現状について、外交の最前線から講義をいただいた。また、本事業の既参加青年である御澤真一郎一等書記官にもお会いし、事業の成果が実務の場で活かされていることを実感した。続いて大韓民国歴史博物館を訪問し、日本統治時代の教育・文化や朝鮮戦争の経緯を含む19世紀末の開港期から近代に至るまでの韓国の歴史の変遷を学んだ。

スウォンでは、華城行宮^{iv}を訪問した。ガイドの解説を受けつつ見学し伝統武芸の演舞も観覧した。当日は秋晴れの清々しい陽光に恵まれ、伝統建築の美しさが一層際立っていた。また、派遣団として皆と現地で共に過ごす中で、団員一人ひとりの個性が自然に見え始め、互いに家族のような親しさが生まれつつあることを感じた日でもあった。

チョナンでは、国立中央青少年修練院^vを訪問し、地元の青少年とeスポーツ体験や日韓双方による文化紹介などの活動を通じて交流した。

チョナン二日目は、地元の私立大学であるナザレ大学を訪問し、テコンドー部の気迫のこもった迫力ある演舞を見学させていただいた。午後は天安市青少年複合コミュニティセンターを訪問し、現地の青少年とヤッカクッキー製作、K-POPダンス、韓国の伝統遊びなどを通じて交流した。特にK-POPダンス体験では講師の本格的な指導のもと、日本の青年たちが急速に上達し、全体会で披露する頃には現地青年と互角の仕上がりととなり、会場は大いに沸いた。言葉に頼らずとも、身体表現や音楽が文化の深層を伝え、心の距離を一気に縮めることがある。こうした非言語的な交わりも、国際交流の醍醐味の一つであることを実感した日となった。

ソウルに戻った私たちは、景福宮^{vi}を見学した。見学前に韓服に着替え、女性はヘアセットまで施していただいた。装いが整うと青年たちの表情が一斉に晴れやかになり、場の空気までふわりと明るさを帯びた。韓服をまとっての見学は、宮廷文化や歴史を身体感覚として理解する貴重な機会ともなった。

● 「日韓青少年交流会」(10月24～25日)

冒頭で述べたとおり、本年度のディスカッションプログラムは、ソウルでの対話、帰国後の実践期間、東京での最終討議という三段階・一連の流れの中で進められた。青年たちは、国境を越えて共に考え、行動し、再び議論へ戻るこの仕組みを通して、学びを段階的かつ実質的に深めた。

ディスカッションプログラム 前半の記録

Stage 1：ソウル【出会いと基盤形成一違いに気づき、共通性を見いだす】

ソウルでの二日間は、青年同士が初めて対面し、以後の協働の土台を築く序章であった。初日、初対面ゆえの緊張はありつつも、レクリエーションを通じて互いの距離が自然と縮まり、午後には翌日の本格的な討議に向けた信頼の芽が育ち始めていた。

夕刻には日韓国交正常化60周年記念式が開催され、韓国側からはチェ・ウンジュ青少年政策官をはじめとする性平等家族部およびKYWAの代表者、日本側からは南順子大臣官房審議官ら内閣府の代表が参加した。この式典は、政府レベルで青年交流の意義を再確認する象徴的な場であると同時に、青年たちにとっても一層の一体感をもたらす契機となった。

二日目には、まず互いの国の社会状況を確認し合い、議論の前提となる用語の定義や、焦点とすべき課題について双方の認識を丁寧にすり合わせる作業から始まった。この過程で価値観や文化的背景の相違が浮かび上がったが、それらを尊重しつつ、互いに納得できる議論の方向性を探る姿勢が育まれていった。

対話が深まるにつれ、少子高齢化、教育、ワーク・ライフ・バランス、環境、ソーシャルメディアの各テーマに共通する構造的課題が見えてきた。「実態を自ら確かめたい」「社会的背景の違いを越えて共有し得る論点がある」「現場に足を運ぼう」「日韓双方について前向きな発信が求められる」など、行動計画^{vii}の核となる着想が次々に生まれ、会場は熱気に包まれた。午後には、テーマごとにこれまでの対話を総括し、得られた示唆と選定した行動計画についての発表が行われ、ソウルでの序章はひとまず締めくくられた。

行動計画策定までの対話の積み重ねを通じて、青年たちは固定化された認識や既存の枠組みにとらわれず、互いの経験と視点から学び合う柔軟な姿勢を身につけて

いった。この姿勢こそが、続く行動計画の実践と東京での最終討議を支える基盤となった。※「日韓青年交流のつどい」(11月25日～27日)に続く

(ホームステイ10月26日～27日)

10月26日から27日にかけて、ソウル市内でホームステイが行われた。26日の朝、日本青年はホテルでホストファミリーと合流し、それぞれの家庭へ向かった。今年度は韓国側のご厚意により、団長である私も清野渉外とともに参加させていただいた。

私たちを迎えてくださったご夫妻は大変気さくで、到着後すぐに近所の文化施設や裏山の散策に案内して下さった。道中の会話は、オモニの趣味であるダンスと合唱と旅行、日々の健康維持の工夫、ご家族の近況など、暮らしの息づかいが自然と伝わる話題で満たされた。お二人は毎日よく歩くそうで、ソウル市の歩数連動型ポイント制度^{viii}を楽しんで活用しているとのことだった。夕方には市場で一緒に買い物をし、オモニの指導でビビンパ作りに挑戦した。アボジは「より美味しく食べる方法」を丁寧に教えてくださり、威厳と温かさを併せもつお人柄が印象的だった。息子さんの部屋をお借りした夜は穏やかな安心感に包まれ、翌朝も早い時間にもかかわらず、オモニは温かな朝食を用意して送り出してくださった。

短い滞在ではあったが、韓国の家庭の暮らし方とお二人の温かさに触れられたことは、忘れがたい経験となった。ホームステイから戻った青年たちも同じ思いだったようで、集合するとすぐに、興奮気味に家族との思い出を語り合っていた。どの言葉にも、温かく迎え入れられた喜びと名残惜しさがにじんでいた。今回の体験を通じ、ホームステイが青年国際交流事業にもたらす価値を改めて深く実感した。

(施設訪問等10月27日～28日)

ヨンチョンでは、韓半島統一未来センターを訪問し、統一部の駐在職員より南北分断の現状と平和統一に向けて共感を広げる取り組みなどについて説明を受けた。続いてパジュに移動し、臨津閣平和ゴンドラに乗ってDMZ内へ入域した。この場所では、朝鮮戦争で捕虜約1万3千人が現韓国側に帰還する際に渡った「自由の橋」や、DMZ内の集落などについて説明を受けた。いずれも、朝鮮戦争以降の朝鮮半島の歴史と現状、韓国の統一教育に対する理解を深める貴重な機会となった。

ソウルに戻った私たちは、ソウル市立青少年メディアアセンターを訪問し、現地の青年と交流した。青年たち

は、国立中央博物館やノドウル島を舞台に映像撮影を行い、音楽を添えた短編動画を共同制作するなど、創造性と協働性を体現する時間をともにした。その後は、派遣団だけでNソウルタワーを訪れて展望台からの景色を眺望し、帰りは皆でケーブルカーに乗って下りながら、ソウルでの最後の夜景を楽しんだ。

●帰国～帰国後研修（10月28日～29日）

10月28日、私たちは10日間の韓国での活動を終えてソウル金浦空港から帰国の途についた。翌29日の帰国後研修では、10日間の活動を振り返り、一人一人が感じた成果と学び、東京でのつどいに向けた抱負を共有した。久しぶりにそれぞれの家庭に戻る前に、あらためて全員で気持ちを一つにする時間となった。

●「日韓青年交流のつどい」（11月25日～27日）

韓国青年団の来日にあわせ、東京で3日間の「日韓青年交流のつどい（以下、つどい）」が開催された。ソウルでの議論から約1か月を経て再び両国の青年が顔を合わせ、最終成果としての「日韓青年AGENDA25」をまとめる場である。

ディスカッションプログラム 後半の記録

Stage 2：行動計画実践期間【学びの深化と行動への転換】

帰国後の約1か月間、青年たちは選択したテーマごとに行動計画を実践した。働き方の領域を議論していた青年たちは、20代の学生アルバイトを対象とした実態調査を行い、職場で直面する課題を具体的なデータとして可視化した。教育や少子高齢化の領域では、制度や統計の比較整理、オンラインアンケート結果の分析、先行事例の調査などを重ね、両国の共通点と相違点をより精緻に捉えていった。環境保全に通じる地産地消の検討にあたった青年たちは、農産品直売所を拠点としたフィールドワークをSNSで発信し、議論を社会と接続する工夫を試みた。ソーシャルメディアの領域では、新設したSNSアカウントを活用し、両国の青年が協働してポジティブな発信を行う取り組みを実行した。

遠隔地にあってもSNSやオンライン会議を活用することで協働の輪は保たれ、この期間を通じて青年たちは「議論の参加者」から、課題解決に向けて主体的に動く

「実践者」へと確かな成長を遂げた。

Stage 3：東京【成果の結晶と持続する絆の構築】

東京での再会は、一か月の実践成果を携えた青年たちが、これまでの議論をさらに発展させる場となった。初日、活動報告から討議が再開されると、実践で得た経験やデータが新たな論点を呼び込み、議論はより具体性と深みを増していった。

二日目、テーマごとに手書きで模造紙にまとめたAGENDAの仮案に対して、担い手、社会的意義、継続性など、行政・企業レベルにも通じる視点から鋭い指摘が寄せられた。青年たちはそれらに丁寧に応答しながら、その理念はもとより実効性を一層意識した内容へと磨き上げていった。

夕刻には、日韓国交正常化60周年記念青年交流レセプションが開催された。日本側からは古川直季内閣府大臣政務官、韓国側からは駐日本国大韓民国大使館のオ・ソントク参事官、KYWAのキム・ギョンファン理事をはじめ政府関係者が出席した。ソウルと東京を結ぶ今年度の一連の取り組みが、政府レベルでも位置付けられていることを印象づける機会となり、会場は一体感と感動に包まれ、盛会となった。

最終成果発表では、青年たちは自らの言葉で「日韓青年AGENDA25」を紹介した。ソーシャルメディアの領域では、今後少なくとも1年間、SNSを通じて両国に関する前向きな発信を継続していくなど、複数のグループがプログラム終了後も協働を途切れさせない姿勢を明確に示した。そこには、今回の交流を一過性の学びに終わらせず、自らの手で未来を形づくっていくとする意志が確かに息づいていた。最終日、韓国側のキム・ジンゴル団長とも認識を共有したことであるが、ここで育まれた青年たちの絆が未来へ繋がっていく手応えを感じ、つどいは幕を閉じた。

●おわりに

つどいが幕を閉じてから、早くも二週間が経とうとしている。濃密だった半年間の経験は、今も胸の内で静かに揺れ続けている。これらの出来事は、これから時間をかけて、少しずつ私たち一人一人の中に沈殿し、やがて新たな視座として育っていくのだろう。そして同時に、この経験は終わりではなく、次の歩みへの出発点でもある。

交流の成果は、事業の期間だけで完結するものではない。そこで得た学びや気づき、感謝の思いを、これからの人生の中で育み、社会へと還元していくこと——それこそが事後活動であり、この事業が持つ本質的な価値にほかならない。

日韓国交正常化60周年。この節目の年にあって、両国には多様な論点が存在し、国際社会は既存の枠組みではとらえきれない複合的・重層的課題が交錯している。こうした時代だからこそ、固定化した認識や立場を超えて対話し、新たな価値を創造していく青年世代の交流は、これまで以上に大きな意味を持つ。

私たちが訪れた韓国には、議論をともにし、一人ひとりの名前を呼び合える友人や、温かく迎えてくれたホストファミリーがいる。ふとした瞬間に、その笑顔が鮮やかに思い出される人たちがいる。こうした絆の積み重ねこそが、言葉や制度で捉えきれない「国と国のあいだの関係」を、静かに、しかし確かに支えていく。結局のところ、どの時代においても国と国の関係を動かすのは「人」であり、人と人との間に生まれる信頼と共感こそが、国際情勢の移ろいを超える平和の基盤を創る。

青年たちが選んだスローガン「60年の絆 영원히！」は、過去60年の歩みを未来へとつなぐ力強い宣言である。全員が精鋭である青年の皆には、その湧き立つ好奇心と未知の世界に一步を踏み出す勇気を胸に、それぞれ

が選び取る世界や地域社会へ、そして未来へ向かって歩み続けてほしい。

60年の絆、永遠に——영원히！

●追伸

村松副団長、阪口副団長、永田渉外、清野渉外、半年間にわたり、力を尽くして支えていただいた。ここに辿り着くまで、数え切れないほど、葛藤や失敗、笑い、そして胸が熱くなる瞬間があった。その歩みの中で、20名の青年が、時に壁に直面しながらも勇気を振り絞り、それぞれの歩幅で確かに成長していく姿を、皆さんと見守れたことは大きな喜びだった。どんな時も寄り添い、ただ真心から青年たちの成長を願い続けた皆さんの存在が、派遣団を支える縁の下の大きな力であった。ここに深い感謝の意を込めて。

キム・ジンゴル団長、キム・ボリム副団長、イ・ダウン副団長、韓国で私たち派遣団のお世話をしてくださったクォン・ソンミン氏、キム・ジョンファ氏、麓有莉氏をはじめ、事業に関してお世話になった全ての皆さまへ、皆さまが示してくださった温かなご支援と高い専門性に、改めて心からの敬意と感謝を申し上げる。

-
- i 東京での中核的プログラムで本事業の中で長きにわたり実施されてきた歴史あるイベント。韓国から招へいた青年と日本の青年が文字通り「つどい」、ディスカッション、文化交流、成果発表等を行う。
 - ii 「民藝運動」で両国を繋いだ日本の思想家・柳宗悦が1930年代の朝鮮半島で収集した工芸品を展示した特別展。表敬訪問当日、1階ギャラリーで開催されていた。
 - iii 韓国性平等家族部と連携して青少年育成や国家間青少年交流を実施する団体。
 - iv 華城行宮は、朝鮮王朝第22代・正祖（チョンジョ）が造営した行宮であり、行宮とは王が地方滞在時に用いた宮殿のことである。
 - v KYWAが運営する国内最大の拠点であり、青少年育成、国際交流、障害のある青少年の支援の三本柱で事業を展開している研修施設。
 - vi 景福宮は、朝鮮王朝の初代国王・太祖（テジョ、李成桂）が1395年に建立した王宮であり、ソウルの中心に今も静かに往時の気配を留める歴史的象徴である。
 - vii 日韓青年AGENDAを「日韓の青年と一緒に検討したり取り組んだりするべき課題」と定義し、行動計画は、テーマごとのアジェンダ案に基づき東京での最終討議までの間に個人で実践できる具体的なアクションを計画するもの。
 - viii 毎日の歩数に応じてソウル市から生活用品や食料品などと交換できるポイントが付与される制度とのこと。

事業アンケート

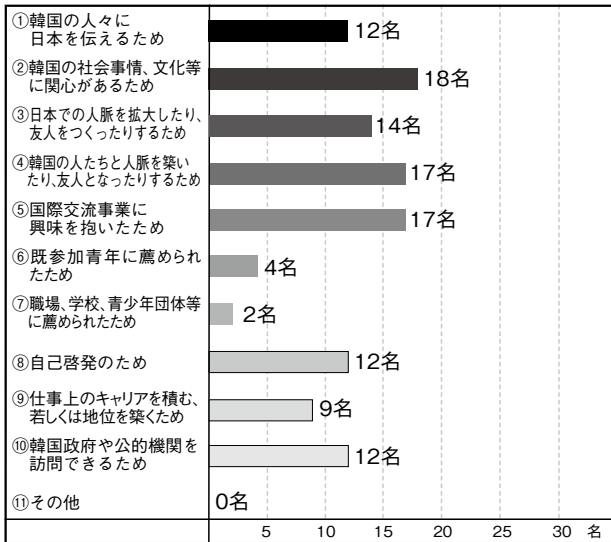
I 日本参加青年アンケート

アンケート対象者：団長、副団長、渉外を除く参加青年20名

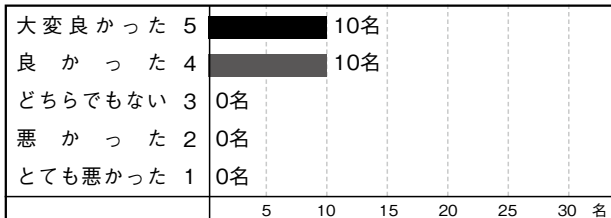
1. 全体評価

(1) あなたは、なぜこの事業に参加したのですか。

(複数回答可)

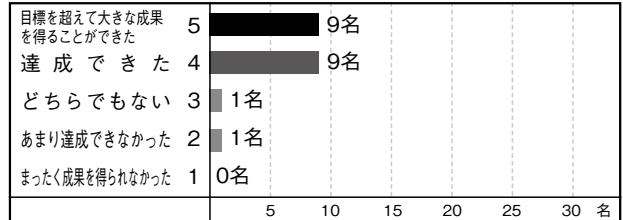


(2) 事業全体をどのように総合評価しますか。



- ・韓国という国に対する関心が非常に高まったとともに、かけがえのない人々との出会いが生まれた。特に、青年との交流会では、ただの文化体験に留まらず、韓国の方々の情に触れる機会が多く、忘れられない時間になった。
- ・内閣府が行っているプログラムのため、学校や個人単位では経験できないことを沢山させていただいた。
- ・旅行などでは得られない貴重な経験を通じて、普段は見ることのできない韓国の姿を知ることができた。

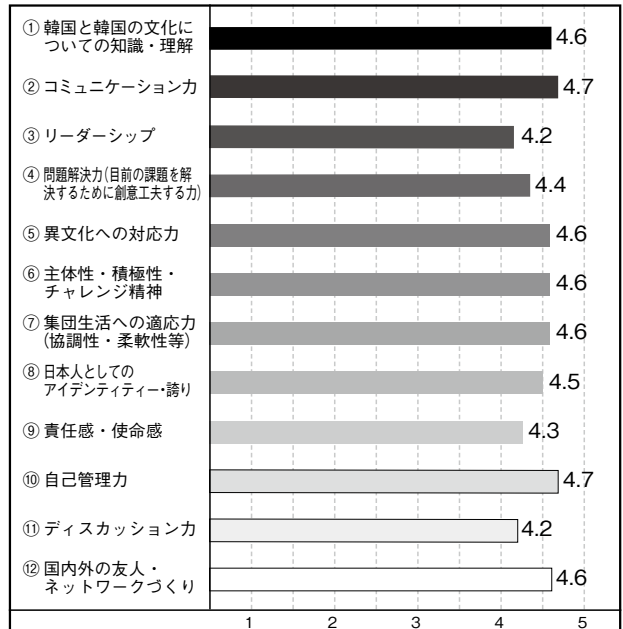
(3) この事業に参加するにあたって、あなたの目標は何でしたか。また、その目標は達成できましたか。



- ・コミュニケーション能力、挑戦力、多様性を学ぶ。
- ・異なる文化や価値観を持つ青年たちと交流し、相互理解を深めること。
- ・韓国への理解を深めること。そして異なる価値観を持つ人と協力しながら活動する力を身につけること。

(4) 以下の①～⑫までに掲げる項目に関し、この事業全体を通じて得られた自らの成長等への効果について、以下の5～1のうち、該当すると思われるものを選択してください。

- 5：大きな効果があった／4：効果があった／
3：どちらでもない／2：あまり効果がなかった／
1：効果がなかった



※数値は参加青年20名の平均

(5) 上記(4)に掲げたもの以外で、事業参加によって具体的に得られたものがあれば記入してください。

- ・共感力、傾聴力。
- ・物事を割り切って考える力。
- ・万全でない状況におけるメンタルの安定化。

(6) あなたはこの事業への参加を通じ、人生、社会などについての考え方が変わったと思いますか。

人生の進路を考慮直すほどの大きな影響を受けた	5	5名
大きく変わった	4	11名
どちらでもない	3	4名
あまり変わらなかった	2	0名
全く変わらなかった	1	0名

- ・多様な考え方や価値観が共存する社会の中で、自分の意見を持ちながらも相手を理解する姿勢が大切だと感じた。これまでよりも柔軟に人と向き合えるようになったと思う。
- ・自分で積極的に扉を開いていくことが大切だと学ばされた。
- ・異なる価値観や文化に触れる楽しさを実感し、国際社会で活躍したいという思いがより一層強くなった。
- ・この事業に参加したことで、人生や社会に対する考え方が確実に変わったと感じている。異なる文化の中で暮らし、学び、働く人々と出会ったことで、自分の世界がどれほど限られていたかに気付くことができた。特に、言葉の壁を乗り越えて心が通じた瞬間に、言語が人と社会をつなぐ力の大きさを実感した。その経験から、今後は韓国語をいかして国際的な仕事に挑戦し、人と人をつなぐ架け橋のような存在になりたいと考えるようになった。

(7) あなたはこの事業への参加を通じ、あなたと韓国の人々との相互理解が深まったと思いますか。

とても深まったと思う	5	7名
深まったと思う	4	11名
どちらでもない	3	1名
あまり深まったとは思わない	2	1名
深まったと思わない	1	0名

- ・ホームステイを通じて韓国の生活を体験できたため理解が深まった。
- ・ディスカッションでは意見の違いを尊重しながら話し合い、ホームステイでは日常生活を共にする中で、互いの文化の根底にある価値観を感じ取ることができた。言葉の壁を越えて笑い合ったり、助け合ったりする時間を通して、国は違っても人の温かさは同じということを実感した。

- ・プログラム時間外にも相手国の青年と積極的に交流し、関係性を築いたことで忌憚のない話を聞くことができたため深まった。

(8) あなたはこの事業への参加を通じ、あなたと韓国の人々との友好が深まったと思いますか。

とても深まったと思う	5	11名
深まったと思う	4	8名
どちらでもない	3	1名
あまり深まったとは思わない	2	0名
深まったと思わない	1	0名

- ・交流の際には、日常や趣味のことなど幅広く情報交換をすることができた。
- ・中々直接会うことはできないが、今はSNSで簡単につながる世の中であるため、韓国の青年らとつながることができた。
- ・それぞれの日程で出会った人たちと連絡先を交換したが、交換して終わりではなく、毎日のように連絡を取っているため深まったと思う。
- ・ホームステイや交流会を通して、沢山話をしたり、文化交流をしたりできた。また、プログラムが終わった後の自由時間などでも沢山関わることができた。
- ・交流した青年から交流後にSNSを通じてメッセージをもらったことや、用意してくれていたギフトなどをいただいたことが強く印象に残っている。また、ディスカッションを通じて歩み寄りと共同作業を行ったことが、同じ年代の若者同士ということもあり、距離を詰めるきっかけになったように感じた。

(9) 事業参加を通じ、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか。

十分に意欲を持った	5	15名
ある程度意欲を持った	4	5名
どちらでもない	3	0名
ある程度関心を持つようになった	2	0名
全く持たなかった	1	0名

- ・今回非常にたくさんの人の働きかけがあったことを感じ、自分も何か社会のために働きかけをしたいと思ったため。
- ・高校時代よりIYEO活動を含め多種多様な社会活動に携わってきたが、今般の経験を糧に、尚一層参加を深めたいというモチベーションが高まった。
- ・もともと思いはあったが、国内の活動にとどまっていた。これからは世界的な部分にも目を向け、積極的に関わっていききたい。

(10) - 1 この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか。

とても役立つと思う	5	15名					
役立つと思う	4	5名					
どちらでもない	3	0名					
あまり役立つと思わない	2	0名					
役立つと思わない	1	0名					
	5	10	15	20	25	30	名

- ・物事に対する考え方について視野を広げられ、また柔軟性や協調性を身につけられたと感じている。
- ・自分の将来について改めて考えるタイミングになった。韓国の仲間と一緒に活動したことで、国際的に活躍したいとか、異文化理解をいかした仕事に関わりたいという気持ちが強くなった。
- ・今回の事業参加により、様々な新しい経験をする事ができた。バックグラウンドや価値観の異なる優秀な人々に出会う機会にもなり、多くの刺激を受けた。
- ・将来は教員になりたいと考えており、ここで体験したことをこれから未来の明るい子供たちに伝えたい。子供たちの視野を広げ、一つの選択肢にして欲しいと思う。

(10) - 2 上記において、5～4を選んだ方は、どのように役立つと考えるか、以下の内容から当てはまる項目を選んでください。
(複数回答可)

① 就職の際の社会活動実績として示すことができる	7名							
② 自分の広い意味でのキャリア実績として示すことができる	12名							
③ 自分の専門分野の実績として示すことができる	4名							
④ 自分の人格形成に対して良い影響を与える	14名							
⑤ 自分の国際的視野が広がったことにより、理解力の向上につながる	17名							
⑥ 国際問題や異文化に対する理解が深まった	16名							
⑦ 韓国における人的ネットワークの広がり	12名							
⑧ 韓国の日本人メンバーとの人的ネットワークの広がり	11名							
⑨ その他	0名							
	5	10	15	20	25	30	35	名

2. 派遣国活動について

(1) 派遣国活動プログラム全体をどのように評価しますか。

大変良かった	5	11名					
良かった	4	8名					
どちらでもない	3	1名					
悪かった	2	0名					
とても悪かった	1	0名					
	5	10	15	20	25	30	名

- ・素晴らしい仲間に出会えて本当に一生の思い出になった。
- ・限られた日程の中でたくさんを経験することができ、よく練られたスケジュールだと感じたため。
- ・活動を通して、異文化理解や協働の大切さを実感できただけでなく、自分自身の成長にもつながる貴重な経験となった。事業の関係者の方々への感謝の気持ちでいっぱい。
- ・どのスケジュールも本当に貴重な経験ばかりで、本当に全てが印象に残っている。沢山の方々との出会い、温かく迎えてくださって幸せな時間だった。

(2) 派遣国活動全体から得たこと、発見したことは何ですか。

- ・人と積極的にコミュニケーションを取ることの大切さ。
- ・熱意を持って伝えれば、相手にも熱意が伝わるということ。
- ・一歩を踏み出す勇氣。集団行動の中で仲間を思いやる気持ち。様々なことに興味を持つことの重要性。
- ・国や文化の違いに関係なく、前向きに行動し、豊かな経験を積んで成長している青年が沢山いることを知り、大きな刺激を受けた。

(3) 派遣国活動中、最も印象に残ったのはどのようなことですか。

- ・メンバー一人一人とエピソードができたこと。偏りのある人間関係でなく、広い交友関係を意識して関わることができ、団員との思い出が印象的であった。
- ・ディスカッション。代表青年との交流でお互いの学生生活やこれからの進路を共有し、夢を語り合ったこと。
- ・ディスカッションの際、意見の食い違いをどう乗り越えるかを全員で考えた場面。最初は戸惑いもあったが、互いの意見を尊重し合う中で少しずつ理解が深まっていく過程に大きな学びを感じた。
- ・ホームステイ。個人的に中学生の頃からの目標で、今回の事業を志望したきっかけでもあったのでそれが達成できたことがとても嬉しかった。
- ・特に印象に残っているのは、日韓国交正常化60周年記念式典での日本文化紹介だ。大勢の前でソーラン節やオタ芸を披露したとき、練習以上に一体感が生まれて、会場全体が盛り上がった瞬間に大きな達成感を得た。日本文化を自分たちの表現で伝えるという経験は、とても貴重だった。

(4) 地元青年との交流をどのように評価しますか。

大変良かった	5	12名
良かった	4	7名
どちらでもない	3	1名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

- 一緒に映画を撮っている時に沢山話をし、普段学校でどのような生活をしているかなど聞くことができ、日本との違いを知り面白かった。
- 年齢や性別に関わらず、さまざまな関心を持つ青年と関わることができ、日本と韓国といった国の違いではなく、個人間での思い出を作ることができた。
- これまで日本に興味のある韓国の方としか関わってこなかったが、今回、必ずしもそうではない方々と交流できたことが良かった。
- 今まで自分の通う大学に留学している韓国人と話す機会が多く、韓国の中高生あるいはそれより小さい子供とは接する機会はなかった。今回、色々な世代の青年たちと話をし、思い出を作ることができ、滅多にできない経験をさせてもらったと思う。

(5) - 1 施設訪問をどのように評価しますか。

大変良かった	5	11名
良かった	4	9名
どちらでもない	3	0名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

(5) - 2 特に印象に残った訪問先を、印象が強い順に3つ挙げ、理由をお答えください。

〈性平等家族部〉

- 単なる個人旅行では訪問することのできない韓国の政府機関を訪問し、特に、韓国の青少年政策について、青少年の声を政策に反映している先進的な事例を学ぶことができた。
- 男女平等の推進や家庭支援政策など、韓国政府が社会のあらゆる分野で公平性を実現しようとする取組を直接学ぶことができた。
- 韓国という国が抱える女性をめぐる問題をはじめ、共働き家庭で生活する子供たちのサポートなど、実際の取組について知ることができたのは、中々できない貴重な経験であった。

〈ソウル市立青少年メディアセンター〉

- 韓国の青少年とともに、彼らの専門分野である映像制作について学んだことと、普段は触れないような高価な機材を使用することができたことが大きく印象に残っている。また、強い関心と希望があればチャンスが与えられる環境であるということに感銘を受けた。
- 自分の夢と意思をしっかりと持った高校生との出会いがあり、高校生が持つパワーに刺激を受け、私も頑張らなければいけないと思った。
- 動画制作を通じて、韓国の青年たちと共に協力し合って和気あいあいと活動できたことが純粋に楽しく、印象に残っている

〈韓半島統一未来センター〉

- 元々興味を持っていた韓国の歴史や、北朝鮮について学ぶきっかけになった。
- 今回の訪問における個人的な関心事として「南北関係の今」について理解を深めたいという点があり、韓国が南北統一に向けてどのような教育・広報活動を展開しているのかを垣間見ることができた。
- 私は今まで「日本から見た北朝鮮」という視点を持っていたが、施設を訪れ「韓国から見た北朝鮮」という新たな視点をもらえたことが大きかった。未来センターの方がおっしゃっていた「人は分断されていても自然は共存している」という言葉が非常に印象に残っている。

(6) 合宿型ディスカッションプログラムをどのように評価しますか。

大変良かった	5	8名
良かった	4	8名
どちらでもない	3	4名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

- 朝食や昼食を韓国青年と共にとることができ、交流を深めることができた。
- 寝食を共にする中で夜はゆっくと話す機会があり、仲を深めることができた。
- ディスカッションだけでなく共同作業が多く、一つのものを作る事の達成感や友情の深まり方を実感した。

3. 事前・出発前・帰国後研修について

(1) 研修内容をどのように評価しますか。

大変良かった	5	5名
良かった	4	14名
どちらでもない	3	1名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

(2) 研修の良かったところ、改善すべきところをそれぞれお答えください。

〈良かったところ〉

- ・事前研修は他の団との交流があり、賑やかな雰囲気のできた点が良かった。
- ・事前研修では、日韓の政府機関関係者からお話を伺うとともに、韓国の方から日韓関係の講義を受けることができ、非常に有意義な時間であった。また、派遣前に対面の研修があり、団のメンバーと関係を構築するのに良い機会となった。
- ・派遣前にチームビルディングをできたのは良かった。
- ・顔合わせや自己開示ができた事前研修と、知識の共有や準備が行えた出発前研修は大変有意義であった。

〈改善すべきところ〉

- ・振り返りの時間はもう少し長くとりたかった。
- ・事前研修で、お互いのことを知る時間が十分になかったところ。全体での自己紹介だけでなく、少人数でアイスブレイクを行う時間があればより良かったと思う。
- ・出発前・帰国後研修において、昼食と夕食を個人ではなく、団で一緒に取ることができればなお良いかと思う。

4. 事業を終了して

(1) 今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。

- ・将来、国際交流の場で萎縮せずに積極的に活動していきたい。
- ・この事業に参加すること自体が大きな挑戦だったが、自分の大きな成長につながることに沁みため、これからも果敢にチャレンジしていきたい。
- ・この事業で得た経験は、掲げていたキャリアとしての目標を達成するためだけでなく、人との関わり方の面でもいかしていきたい。どのような時も、温かい思いやりを持って生活したい。

- ・事業で得た学びを、まずは身近な人に発信することで、自分の理解をより深めるとともに、誰かが本事業や韓国に関心を持つきっかけになればと思う。また、今回様々な人と関わる中で視野が大きく広がった。この経験を踏まえ、将来のキャリアや生き方を改めて考え、国際的な視野をもつグローバル人材として活躍していきたい。さらに、このような事業に関心を持つ人たちが参加しやすく、より充実した事業となるようなサポートにも関わっていきたい。
- ・成長した自身のコミュニケーション力や、韓国青年とのつながりをいかして自身の活動の幅を広げたい。また、事後活動として今後も日本青年が韓国青年と関わる際にサポートができれば考える。
- ・本事業のOGとして報告会や事後活動を通して自身の経験を発信し、国際交流事業に興味を持ってもらい、そして国際交流に関心を持つ人が一歩を踏み出せるよう支援し、挑戦を後押しできるような存在となれるよう努力したい。

(2) その他、この事業の感想や事業に対する意見・提言があれば記入してください。

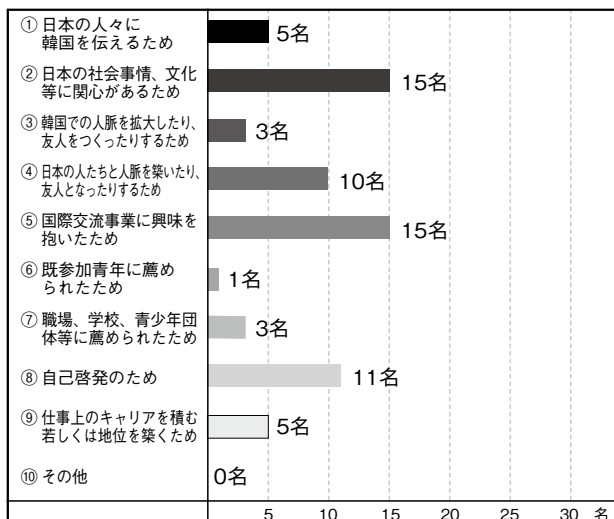
- ・ここまで支えてくださった皆様、各関係機関の方々に心より感謝申し上げます。御尽力と温かいサポートがあったからこそ、安心して学び、挑戦し、成長することができたと思う。
- ・本当に貴重な経験や体験をありがとうございます。この事業への参加が決まった際、なぜ自分が合格したのか分からなかったが、多くの応募者の中から選んでいただいたという事実に恥じぬよう、そして日本青年という大きな集団の代表として、国の代表として恥じぬよう行動できたと思う。今後、どのような形で恩返しができるかは分からないが、韓国で培った経験をいかし、さらに日本団メンバーから刺激をもらい、自分の夢が叶えられるよう行動していきたい。

II 韓国参加青年アンケート

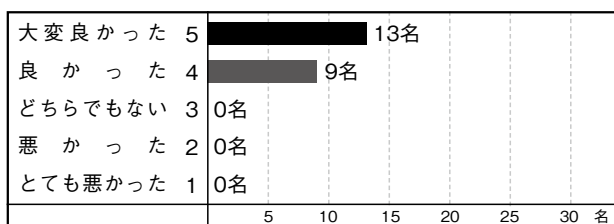
アンケート対象者：団長、副団長等を除く参加青年22名

1. 全体評価

(1) あなたは、なぜこの事業に参加したのですか。
(複数回答可)

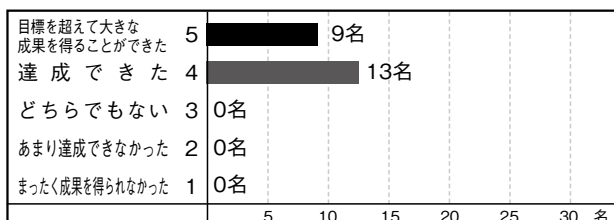


(2) 事業全体をどのように総合評価しますか。



- ・ 普段は経験できない国際交流の機会を得ることができた。
- ・ 日本の友人と仲良くなり、文化交流を通じてお互いへの理解を深めることができた。
- ・ 観光ではできない貴重な経験ができ、とても良かった。様々な交流活動で得た多くの経験が自分の成長につながると思う。

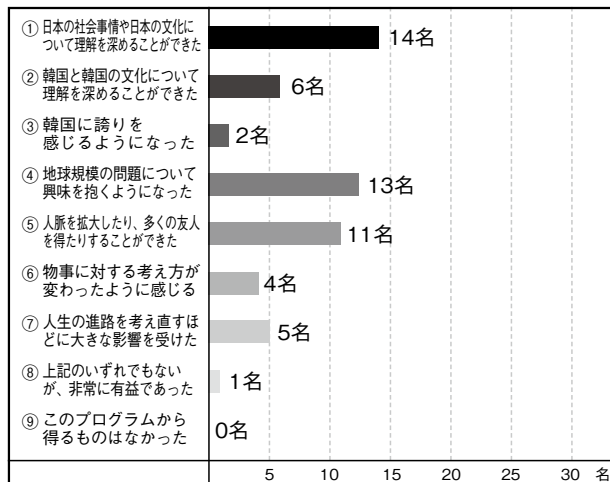
(3) この事業に参加するにあたって、あなたの目標は何でしたか。また、その目標は達成できましたか。



- ・ 日本青年と交流して親睦を深め、日本について知り、理解すること。
- ・ 多様な価値観と経験を持つ人々と出会い、一緒に交流しながら学ぶこと。
- ・ 日本と韓国の交流。そして、プログラムが終わった

後も継続できるような連帯感を作ること。

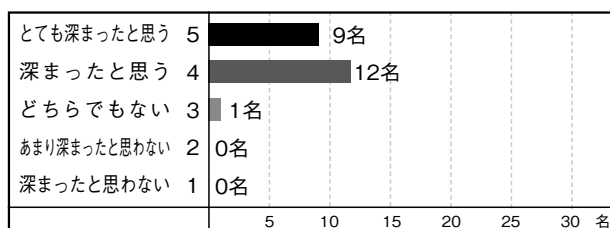
(4) あなたは、この事業からどのような成果を得ましたか。
(複数回答可)



(5) この事業から、(4)で示したものの他に、具体的に得られたことがあれば記述してください。

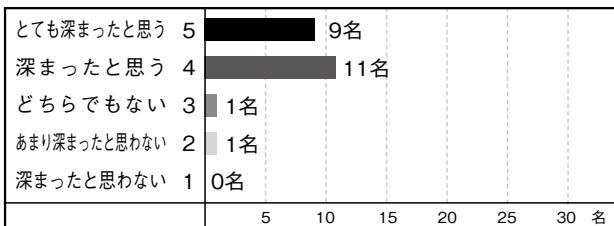
- ・ 見聞が広がった。
- ・ 日本の青年とのコミュニケーションと思い出作り。
- ・ 外国人青年との対話を通じてグローバルコミュニケーション能力を向上させること。
- ・ 日韓両国のすばらしい青年たちと出会い、人脈を築くことができた。

(6) この事業を通じて、あなたと日本人の人々との相互理解が深まったと思いますか。



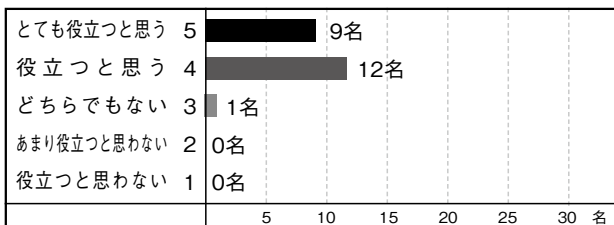
- ・ 互いの違いについて語り合い、仲良くなることができた。
- ・ 深い対話を通じてお互いの考えを分かち合うことができた。
- ・ 言語が通じなくても意思疎通できるのが不思議だった。
- ・ ホームステイで日本の家庭の日常と観光、両方を経験し、その中でお互いの様々な文化を理解することができた。お互いの生き方を共有し、深く通じ合えたと感じた。

(7) この事業を通じて、あなたと日本の人々との友好が深まったと思いますか。



- ・言語の壁を越え、持続的に連絡を続けることができた。
- ・日本青年たちと沢山話すことができ、またソウルや日本で会う約束をした。
- ・相手国を理解するために、お互いが努力する姿をたくさん見ることができた。

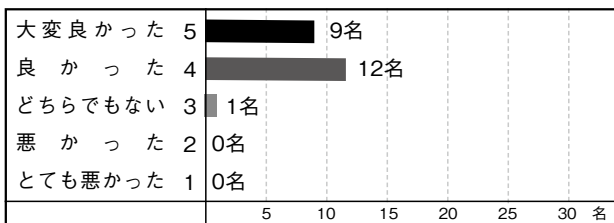
(8) この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか。



- ・今回の経験を通じて、自分の視野を広げることができたと思う。
- ・グローバルな活動を通じて、より幅広い職業を考えることができるようになった。
- ・世の中の広さを改めて体感できた。これからどう生きるべきか、どのような道に進むべきか改めて考える契機になった。

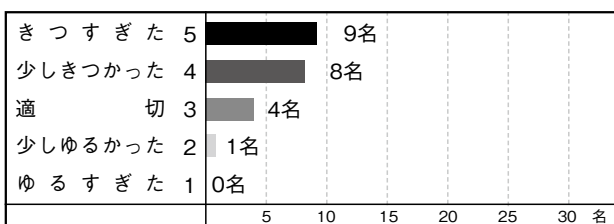
2. 日本での活動について

(1) プログラムの内容についての全体評価



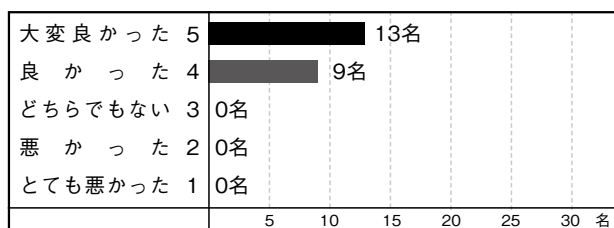
- ・文化交流が効果的にできた。
- ・充実したプログラムで構成されていた。
- ・単なる観光では体験できないものが多かった。

(2) 日程について



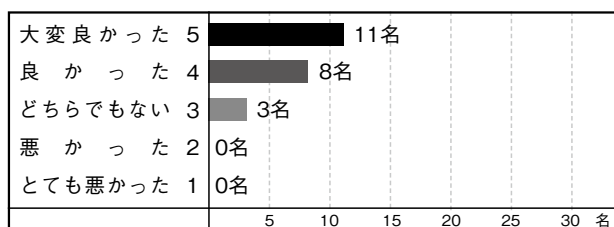
- ・学びの時間と休憩が適切にあったと思う。
- ・プログラム自体はとても良かったが、移動がタイトだった。

(3) 大阪府プログラム【11月19日～21日】文化体験等



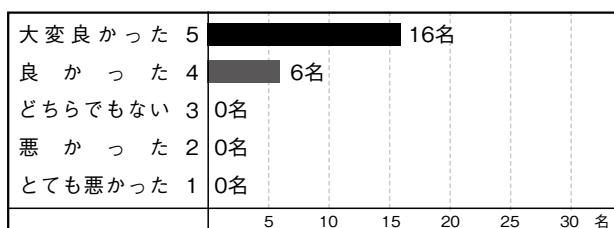
- ・大阪ならではの文化をたくさん学ぶことができた。
- ・めったにできない経験をすることができた。
- ・グループツアーで大学生たちと交流する時間を持つことができ、本当に良かった。

(4) 大阪府プログラム【11月20日】ディスカッション



- ・日本の大学生たちと大学の教室で一緒にディスカッションする経験ができて本当に良かった。
- ・大阪女学院大学の皆様やIYEOのメンバーなど、多様な構成員で共にディスカッションすることができた。ディスカッションの進行も非常に円滑に進めていただいた。
- ・大阪には以前よく行ったが、これまで現地の人々と対話する機会がなかったため良かった。

(5) 山形県プログラム【11月21日～24日】文化体験等



- ・日本と山形の伝統について知り、とても楽しかった。
- ・山形という地域について詳しく知ることができた。
- ・一番良かった。山形ならではの魅力を感じる事ができた。芋煮も良かったし、浴衣、花笠など日本ならではの魅力を感じる事ができた。

(6) 山形県プログラム【11月22日～24日】ホームステイ

大変良かった	5	17名
良かった	4	5名
どちらでもない	3	0名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

- ・初めてホームステイを体験したが、沢山の温もりを感じた。
- ・ホームステイができたこと自体が幸せでありがたかった。
- ・ホストの方々が充実したプランを用意して下さった。様々な場所を訪問し、観光やショッピングなど、全てを経験することができた。
- ・とても素敵な家庭にホームステイしながら個人と個人の深い交流ができた。本当に温かく、大切な思い出になった。
- ・日本家庭の生活を近くで見て、直接体験することができて良かった。またこれからも連絡をしていきたく、本当に連帯が深まったと感じた。

(7) 東京プログラム【11月25日～27日】日韓青年親善交流のつどい

大変良かった	5	16名
良かった	4	6名
どちらでもない	3	0名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

(8) 東京プログラム【11月26日】日韓国交正常化60周年記念青年交流レセプション

大変良かった	5	12名
良かった	4	9名
どちらでもない	3	1名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

- ・同世代の日本の方々と話げできた。
- ・日本という国にもっと近づくことができたと思う。
- ・今後の日韓関係についても考えることができた。

(9) 活動中、もっとも印象に残ったのは、どのようなことですか。

- ・日本人との交流、韓国とどのような違いがあるのかなどを知ることができた。
- ・一緒にコミュニケーションすること。多様さを経験すること。

- ・ホームステイが本当に記憶に残った。日本のおもてなし文化を肌で感じることができた良い機会だった。

3. 事業を終了して

(1) この事業に参加して、日本に対する印象は変わりましたか。

非常に良くなった	5	13名
良くなった	4	6名
変わらない	3	3名
悪くなった	2	0名
とても悪くなった	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

- ・日本に対する関心が高まった。
- ・私たちと似ていると感じる点が多く、親しみを感じた。
- ・マナーが良く、優しい方々に沢山出会えた。
- ・日本の方は皆親切にしてくれた。相手国に配慮する姿が印象的だった。
- ・日本は元々好きだったが、旅行では分からなかったことを色々学ぶことができた。特に、礼儀正しさという側面においては韓国より繊細で、良い印象を受けた。

(2) 今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。

- ・人生のよき原動力になりそうだと感じている。
- ・今後も日本青年と連絡を続け、韓国の青年にも経験を共有したい。
- ・今後の良い世の中において、私自身もより良い人になりたいと改めて誓った。
- ・人生に大きく役立つような経験だった。周りにこのプログラムを知らせたい。
- ・日韓両国の接点をもっと沢山作っていきたい。

(3) その他、この事業に関して特に意見・提言があれば記入してください。

- ・ただの観光ではできない経験を沢山できたことがこの事業の一番良いところだと思う。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。
- ・ディスカッションだけでなく、日韓の青年と一緒に観光できる時間ももう少しあれば良かったと思う。
- ・パフォーマンスのある歓迎会では、食事ができる時間をもう少しいただければと思う。
- ・和食を経験する機会が少なかったのが残念だ。

III 総括評価

最後に、アンケートの総合評価を含めて、今回の総括評価をまとめる。

〈日本参加青年〉

「事業全体をどのように総合評価しますか[1-(2)]」との問いに対して、日本参加青年は全員が5段階評価の4（良かった）以上を付け、極めて高い評価であった。

日本参加青年からは、「通常では体験できない活動や、個人旅行では訪問できない場所を訪れることができた」「旅行では得られない貴重な体験を数多く経験できた」「韓国の青少年との交流を通じて文化への理解が深まった」「活動内容が毎日充実しており、非常に有意義な日々であった」といった声が寄せられた。

さらに、「かけがえのない友人ができた」「大切な人々との出会いが生まれた」「韓国の方々の情に触れる機会が多く、忘れられない時間となった」など、人とのつながりに関する感想も多く見られた。

加えて、「多様な価値観や経験をもつ日本人青年たちと共に活動したことで、自身の視野を広げるとともに、これからの生き方や社会への関わり方について改めて考えるきっかけを得た」「参加青年の年齢、分野、専門性などが多様であり、これまでにない視点を得るとともに、大いに刺激を受けた」など、日本人参加青年と共に活動する中で多くの学びを得たという意見もあった。

〈韓国招へい青年〉

「この事業をどのように総合評価しますか[1-(2)]」という問いに対して、韓国招へい青年は全員が5段階評価の4（良かった）以上を付け、極めて高い評価であった。

韓国招へい青年からは、「日本人青年と親しくなり、文化交流を通じて相互理解を深めることができた」「お互いの違いについて語り合いながら、関係を深めることができた」「訪れたことのない日本の地域やホームステイなど、通常の旅行では得られない貴重な経験ができた」「とても温かい家庭でホームステイを経験し、個人と個人の深い交流が生まれ、心に残る大切な思い出となった」といった感想が寄せられた。

これらのことから、東京及び地方での各種施設の訪問や交流が、多様な交流の機会を生み、日本への理解を深めるきっかけとなったと考えられる。

以上の結果から、両国の参加青年は事業全体を極めて高く評価した。また、「両国青年相互の理解と友好の促進を図る」という本事業の目的に対して、昨年度に引き続き、本年度も十分な成果を収めたものと評価することができる。

両国の参加青年は、今後それぞれの道を歩み始める。将来、青年たちが進む分野は、多種多様であろうが、事業を通じて得た学びや経験、人脈をいかしながら、それぞれの道で活躍することが期待される。

内閣府青年国際交流事業報告書 2025

令和 7 年度 日本・韓国青年親善交流事業

発行：内閣府

〒100-8914

東京都千代田区永田町1-6-1

TEL：03-5253-2111

URL：<https://www.cao.go.jp/koryu/>

編集：一般財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013

東京都中央区日本橋人形町2-35-14

東京海苔会館 6 階

TEL：03-3249-0767

URL：<https://www.centerye.org/>

印刷：株式会社 長正社